

の中で、子どもたちの問題で2回の市長・教育長への要請行動があり、5月1日には、市長と教育長に、コロナ対策の総合的な対策の問題提起もしていた。署名行動は、10月末まで取り組まれる。困難な状況の中で大きな広がりとはなっていないが、当たりの行動として市民に受けとめられているのではないか。

8月3日に開催された臨時市議会では、4億8875万円の予算で7項目の検査等の助成を可決している。全自動PCR検査機器の購入助成金も計上された。まだ私たちが署名行動で求めている4点の対応には届かないが、最低の条件は整いだしている。

コロナ後の社会を「自分ごと」として考え、行動する

私たちはこの半年、「コロナと子どもたち」を中心に行動してきた。8月26日に開催された2回目のトーク「学校の一斉休校が子どもたちや保護者に与えた影響は？」学校の対応は？」でも、びっくりするほど

濃密な議論の結果、再開された学校での過密日課・授業の是正、少人数学級の実現などについてまとめ、市長と教育長に『新型コロナウイルス感染症防止対策は、科学的・医学的な知見に立ち、子どもの権利を熟慮した施策を求めます』を提出する準備をし

ている。

今後、コロナ後の社会をどう描いていくのか。持続可能な循環型の社会をどう提案・つくりだしていくのかが問われていると思っっている。これからも議論の場をしっかりとつくりだしていきたい。さらに、総選挙での市民連合を通じた政策提言、

新型コロナウイルス感染症対策を自治体が変わる！ 「世田谷モデル」とは

星野 弥生

新型コロナウイルス感染症への有効な対策が政府からは何も示されないまま、安倍は何もかも投げ出してしまい、安倍は辞めても安倍政権は続くというのは確実となった総裁選の結末……。そんな息苦しい閉塞状況の中、「世田谷モデル」に注目が集まりました。感染が再び拡大していた7月に、政府はGOTOトラベルキャンペーンを何が何でも強行。一度決めたならやめられない政府の暴走。何をしても経済対策が優先、という国の無策を前にして、自治体は何をしたらいいのだろうか……。

世田谷区長の保坂展人さんは、内申書裁判で有名になった元中学生。受験したすべ

2021年3月の千葉県知事選、2022年6月の松戸市長選に向かって、新しい発想でコロナ後の社会を模索し、多くの市民が「自分ごと」としてわがまちの将来像を議論できるようにしていきたい。

(よしの・しんじ／市民自治をめざす1000人の会)

ての高校を内申書への不利な記述ゆえに不合格になり、自ら教育ジャーナリストへの道を切り開きました。1996年には「中卒・定時制高校中退」の衆議院議員となり、「国会の質問王」として10年間国会議員を務めたあと、2011年には世田谷区長に転じました。東日本大震災と原発事故直後に区長への立候補を決心したのは、このようない大事がある時に、自治体の首長にはやらなければならないこと、やれることがたくさんあると確信したからでした。

「モデル」を支える二つの提案

3期目の再選を果たしてから1年後に起

こったコロナ禍。見えない国の対策方針を待つことなく、首長としてなすべきことを打ち出したのが「世田谷モデル」でした。7月27日に行なわれた新型コロナウイルス感染症対策本部での有識者会合の中で、東大先端科学技術研究センターの児玉龍彦名誉教授が提案した二点の提案が世田谷モデルの基本的な内容です。一つは、現状の「PCR検査」の検査能力を拡大する。もう一つは、介護・医療・保育等の現場で人との接触が避けがたい職種で働いている方々に対して「社会的検査」を実施する、ということ。その二段階を踏んで、検査数を一桁増やしていき、最終的には、ニューヨークでの取り組みの成果を指標として、ハードルを低くした「いつでも・どこでも・何度でも」検査を受けられるようにすることを目指します。

PCR検査はなぜ増えないのか

7月28日に『報道1930』（BS-TBS）に出演した保坂さんは、「世田谷モデル」を中心に多くの時間を使って情報発信する機会を得ました。この番組ではキャスターが、連日にわたって各国の取り組みを紹介し、日本のPCR検査はなぜ増えないのか、を問い続けてきたので、反響は大きく、その後も各局の番組に保坂さんは出演、テレ

ビ・新聞でも大きく取り上げられました。ニュースで伝えられるのは、今日の感染者数、という数字ばかり。いったいどうすれば私たちが安全、安心でいられるかは、「マスク着用」「手洗い」「不要不急の外出を控える」以外、言及されません。中途半端な「アベノマスク」を配布したり、おうちでお茶をすすって犬をなでている「ステイホーム」の映像を流したり、こんな無駄なお金を使うのなら他にやることあるだろう、と苛立つ人々には、保坂さんのPCR検査を増やすべき、というまっとうな提言は強い関心をもって受け止められました。8月4日の、日本記者クラブでの報告 (<https://www.youtube.com/watch?v=VsywabCEW0>) はインターネットで見ることができますが、記者との質疑応答の中での保坂さんの発言をいくつか紹介します。

「第一波の時は、新型コロナウイルスの正体もわからず試行錯誤で対応したこともやむを得ませんが、予想外の速さで第二波に見舞われている今、国の方針を見ても『PCR検査』を増やしていくという意志を感じられません」

「今回のウイルスは、世界で、政治体制の違い、文化や社会、宗教の違いなく襲いかかっています。私たちとしては、抑え込みに成功した国や都市に虚心坦懐に学ぶべ

きですが、PCR検査はできるだけやらないうような方策を取っている例を私は知りません。世界の国々にできて、日本にできない訳がないのです」

「新型コロナウイルスに対し、明治以来の感染症対策の骨格を変えないまま、縦割りに対応しようという法制度と組織の限界が出てきています。ウイルスは、元気な人にも宿り、無症状のままでも感染させる力を持っているとされます。従来の感染症の枠にはまらない相手に対しては、むりやり法制度に入れようとして手が届かない現状を改め、ウイルスに法制度を合わせる必要があると思います」

「社会的検査」の実施

人口92万人を抱える世田谷区での話です。「いつでもどこでも何度でも」と言っただじやないか、92万人になぜしないのか、というような「為にする」批判をする人たち、メディアもあります。これからインフルエンザの流行る時期を迎え、第三波の発生も懸念される中、まず取り組みなくてはならないのが、世田谷モデルの2番目にあげられた「社会的検査」です。社会的インフラを継続的に維持していくために、介護、医療、保育、障害者の施設などの対人接触を避けられない職員に対して検査を実

施し、「感染者の発生を確認してから動き出すのではなく、先回りして職場の安全と健康を確保し、また隠れた罹患者を発見して感染拡大を防止する」効果を期待するというものです。

このような社会的検査を実施する、という世田谷の働きかけにあわせて、国も感染拡大が認められる高齢者施設での定期的検査を職員に対して行なうという姿勢を見せています（8月27日 安倍首相）。社会的検査を行政検査として位置づけることについて照会をしていたところ、9月11日に、国費として対応する旨の回答があり、世田谷区での社会的検査が行政検査として実施できるようになった、とのことです。コロナ感染対策としての検査の実施に対して国が財政支援をするのは当然といえ、当然ですが、「世田谷モデル」の提案が、国の姿勢を変えることになったといえるのではないのでしょうか。さらに、9月15日には、厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策本部から「検査拡充の指針」が各都道府県や保健所設置自治体に示され、感染拡大が見られる地域では世田谷区の提案した社会的検査を、積極的にやってほしいとの要請が出されるに至りました。

9月15日に招集された世田谷区議会第3回定例会では、検査能力の拡充、社会的検

査の実施を実行するための補正予算案が提出されます。この補正予算の中では、コロナ診療にあたる医療機関が経営的に疲弊していることに対し、区として直接、財政支援をすることも盛り込まれています。保健所の業務が雪だるま式に増えている現在、これまでのPCR検査を拡充すると共に、新たに始める社会的検査については、保健所の外側に、独立した大量検査に関わるシステムを構築することが必要です。

まずは一刻も早い時期に社会的検査を行なうことが急務となっています。定例会の冒頭挨拶を保坂さんは「区民の生命と安全を守るために効果的な感染防止対策に全力を尽くしていきます」と結び、改めて、住民のいのちを守るのが自治体の最大の役割であることを明らかにしました。そのため、人員や予算を惜しまないのが区政の根本になくてはなりません。「参加と協働」、これが保坂区政の根底にある考え方はです。そこに私たち区民も共感し応援してきました。コロナは待つてくれません。このコロナ禍だからこそ、区民が声をあげ、知恵を出しあい、共に働くことで、地域から政治を変え、社会を動かすことを具体的に実践できれば、と願っています。

9月11日時点で、世田谷区に対して「ふるさと納税」や窓口、電話、専用口座等に

総額4845万586円の寄附が寄せられています。PCR検査体制を拡充するための「世田谷区新型コロナウイルスを乗り越える寄附金」を現在呼びかけています。区のホームページをご覧ください、支援いただけたら幸いです。

(ほしの・やよい／保坂展人と元気印の会事務局長)

▼表紙絵の作者 ▲



太田 章

(おおた・あきら)

1921（大正10）年2月2日生。東京・日本橋に四人兄弟姉妹の長男として生まれる。父は一流の友禅染め職人だった。38（昭和13）年4月東京美術学校日本画科に入学、父ゆずりの練達なデッサンを多く描き、42（昭和17）年9月繰り上げ卒業。43（昭和18）年に入営、44（昭和19）年5月17日、出征先の満州（中国東北地方）牡丹江省東寧で行軍中、脚気衝心によって倒れ戦病死。享年23。

高等小学校1年生の時、建国祭児童作品展に出品し受賞。42（昭和17）年4月、第4回日本画院展に「キャベツ」で入選。43（昭和18）年4月、第5回日本画院展に「朝春二題」を出品。